

第4回学ぶ喜び・E S D連続公開講座概要報告

- ◇開催日時 平成28年8月19日（金）19：00～21：00
- ◇会場 次世代教員養成センター2号館
- ◇参加者数 14人
- ◇内容

「子どもの学びへの内発的な動機づけ」

研究対象には、教育目標・教育内容・教育方法などがあり、これまでは教育内容に関する研究が重要視されてきたが、実は教育方法を学ぶことが教育内容を学ぶことにもなる、と考えている。



(1) 一分間でE S Dをわかりやすく説明する。

島：一歩踏み出せる子どもを育てること

堀口：よりよい社会をつくるために、思いやりの心を持つこと、行動すること、人間性

矢追：人間が地球と共生できるように特に環境とのつきあいかたを学ぶ

高橋：ヒューマニズムのソーシャルムーブメント

新宮：地球上に今あるものを受け継いで、次に伝えるための教育

中澤哲：身の回りの問題を学んでいく中で、自分ならどうするのかを考え行動する子ども。

大西：よりよい社会をみんなで創っていくために、みんなで学び合う。価値観と行動の変容

向井：次世代の担い手を育む教育。今の社会の矛盾を取り扱う。生活の豊かさを阻んでいるものを焦点化し、それを改善する人を育てる。特に食生活をポイントに。

中澤：持続可能な未来をつくっていくために、環境と人、人と人の関係を改善するために、行動する子どもを育てる

- ・現在のままでは持続不可能であることをどれだけ認識しているか、冷厳な現実認識を持つ必要がある。キーワードとして抽出されるのは、「人と人の関係、つながり、思いやり」「人と自然環境の関係」「人と社会の関係」だろう。



(2) 実物教材の意義

- ・社会の発展と経済の発展と環境の保全の関係がS Dでは重要視されている。これまでは、経済発展の重心がおかれ、環境保全などはかえりみられることがほとんどなかった。この3つだが、なかなかバランスをとることは難しい
- ・社会・経済・環境のバランスの大切さをわかりやすく説明するためには、実物教材が有効だ。実物教材のよさは「物が語る」ということ。

- ・実物教材は、ひとつのモノだが、多面的に見ると、色々なものに見える。文化的背景が違えば見え方が違っても言える。その人がどの位置に立つによってモノの持つ意味が違って来る。また、モノに込める意味から、その人立ち位置がわかる。
- ・新聞記事を並べてみると、新聞社の傾向が見えてくる。特に私は5月3日の憲法記念日の社説に注目し、比較する授業を行っているが、各社の立ち位置が見えるとともに、記事の裏側にある意図を意識させるというメディアリテラシーを養う機会にもなっている。同時に、どの社の社説に共感できるかで、自分自身の立ち位置を知る手掛かりにもなる。

(3) 相対化について

- ・国際的なもの、社会を見るときに、人と人の関係を見るときに「安重根」の新聞記事が有効だ。
- ・「一国の英雄は、他国への侵略者である」案外我々は、自分の国民の立場に立ってものごとをとらえがちである。相手の立場に立って考えるのが国際理解だろう。
- ・相手の文化、歴史、バックグラウンドを洞察する、立場を変えて見ようとする謙虚さがあるか。相対化が重要だ。でも相対化なら、なんでもありになってしまう。そこには何か共有できる基盤が必要だろう。
- ・一握りの先進国が、南の国々を搾取している。皆が平等でなくてはならないという、イスラムの教えに反しているから、バーミヤンの爆破があったという説もある。先進国側からの見方だけで判断するのは危険だ。
- ・ISの場合は、破壊したあとにそれを売り、武器を購入しているという現実がある。そして武器の矛先を途上国を搾取する先進国に向けている、という見方も出てくる。

(4) 相対化の相対化

相対化の相対化が必要だ。相手の見方を洞察する我々のメガネがすでにひずんでいる、ということもあるかもしれない。自分のメガネがひずんでいるかもしれないという認識のもとで、相手の見方を洞察する。洞察しながら、自文化を相対化して、捉え直す。相対の相対化は、自文化や自己をとらえ直す手段である。自己のものを絶対視し、他者を色眼鏡で見るのではなく、自己を相対化することで、他者をとらえ直す手段でもある。

(5) 深い教材研究

①地名に着目して

- ・サラセン帝国が、アラビア半島から、地中海を席卷した。しかし、ジブラルタル海峡を持っているのは、イギリスだ。香港は返したが、地中海の出入りを押さえる良港であるため、今もイギリスが領有している。
- ・なぜジブラルタルというか（地名には歴史がある。地名が一番身近な教材となりうる。）。地名の由来は、ジブラルタル海峡を渡ってイベリア半島を征服したウマイヤ朝の将軍ターリク・イブン・ズィヤードにちなんでおり、アラビア語で「ターリクの山」を意味するジャバル・アル・ターリク[が転訛したものである。サラセン帝国は1942にアルハンブラ宮殿を落とされるまでつづいた。落としたのがイザベラとフェルディナンドで、彼女から資金援助を受けていたのがコロンブスだ。
- ・イザベラはアルハンブラを陥落したのだが、ボアボデルが無血開城をしたがゆえにアルハンブラ宮殿は残った。イザベラは自分の墓をアルハンブラ宮殿に埋葬することを希望ことからわかるよう

に、その美しさを破壊しようとはしなかった。しかし、その息子は、アルハンブラの一部を壊して、キリスト教会をつくった。

・その他

江戸時代に使われた 66 か国を覚えておけば、教材にできる。

阿波に行く途中の島だから淡路島

吉備の国から備中、備後、備前がある

②歴史を動かした人物

- ・江戸城の無血開城をしたのは、勝海舟と西郷隆盛だと思われているけれども、篤姫が手紙を書いた。篤姫が人脈を握っていたからだ。篤姫がいなかったら無血開城できていたかどうかわからない。
- ・阿部正弘は多くの大名からの意見を聞こうとした。それは幕府の弱体化にも映った。そのときにまともな意見を出したのが、勝海舟だった。そしてアメリカのことを知るために、通訳としてジョン万次郎を連れてきたが、万次郎の出自の低さから、それを認めなかったのが水戸斉昭だった。
- ・領事裁判権は不平等条約のひとつとして、それを改善するために薩長政府が努力したと言われているが、法律体系がない当時の日本に対して、領事裁判権を主張するのは、当たり前のことだったのかもしれない。そう考えれば、不平等条約の改正は、政府を肯定化するプロパガンダだったという見方もできる。
- ・干拓地は米が作れない。しかし木綿はよく育つ。帆布ができると、風をうまく利用できるようになる。中世の笹船は水主と潮風で動いていたが、近代になり帆布ができると、無動力船でも進むことができるようになった。咸臨丸にのって勝海舟が艦長になって、欧米視察団を出したが、猛烈な時化にあった身動きが取れなくなったとき、万次郎が仲介役となって、難破船の船員を味方につけた。トラブルがあったが、万次郎が仲介役となって、互いの立場を感じ方、考え方を理解し合い、相対化できたことで、トラブルを乗り換え航海を無事に終えることができた。
- ・内面化された文化の違いがある。相手のことを攻撃してしまうことがあるが、相手にも内面化されたこだわりがあり、こちらに対して嫌な気持ちがあるかもしれない。きちんとそのことを口に出して、互いに理解し合うのが国際理解教育だ。

③ナツメヤシを用いた教材開発

- ・サラセン帝国がスペインを征服したときに持ち込んだナツメヤシを植えたが、今、そのプランテーションが世界遺産になっている。戦争するには食糧補給が重要だ。ジンギスカンは肉を凍らせて干し肉をつくった。サラセンは、ナツメヤシをもっていった。そしてその種をオアシスに植えていった。征服してしばらくたってオアシスに戻ると、ナツメヤシが育っていた。
- ・お好み焼きは、原爆後の何もなかったとき、鉄板さえあれば料理できるものとして広まっていった。一人ひとりの食器がなくてもコテさえあれば食べることができたので、広島で広がっていった。そのソースとしておたふくソースが有名だが、そこに使われていたのでデザート（ナツメヤシ）だ。
- ・実際に食べて（実物教材）、西洋の歴史を考える面白くなる。モノが語る。それを集めることが、実は教育内容にもなっていく。
- ・身近なことから入っていくと、世界史にも共通する側面がある
- ・地域にこだわって、こだわっていくと、地域を突き抜けて世界につながる。
- ・人権や環境や貧困や福祉やら、身近な問題を突き詰めていくと、それがつながり、ESDになっていく。

(6) まとめ

- ・相手の文脈で考え、自文化を相対化することで、違いを乗り越えられることができる。
- ・E S Dは学び続ける、自己更新を続ける、自己の相対化を続ける、学びだ。

講演後の質疑応答

①教材開発のコツ

ひと・モノ・ことをよく見ることで、教材開発のネタが見えてくる。現地に出向いてフィールドワークし、現地の人に聞き取る調査を行う。教師自身が疑問をもつ

②どの新聞記事を残しておくかどうかは、直観だ。問題意識がないと見つけられない。

③目に見える学力と見えない学力があるが、本当に大事なは見えない学力だろう。

